

小学校高学年児童を対象とした教育実践

－ アセスメントツールを用いた支援 －

学籍番号 219206
氏名 奥村 美結
主指導教員 水野 治久
副指導教員 柿 慶子

1. 背景

A小学校における基本学校実習（2021-2022年度）では、担任教諭、習熟度別学習の担当教諭以外にも、他の実習生や特別支援サポーターなど多くの人が児童に関わっていることが観察された。また、授業時間や休み時間などの観察を通して、小規模校ならではの課題がみられた。小規模校ではクラス替えができず人間関係が固定化してしまい、人間関係に課題が生じた場合、解決が難しくなってしまう。さらに、固定化された人間関係によって、クラス内でのコミュニケーションの中に家族のような気安さを感じた。そして、その気安さからクラスメイト同士で攻撃的に聞こえる言葉の使用が目立った。生徒指導提要（2022）や学習指導要領総則編（2017）では、学級経営を重要なものと捉え、学級経営の焦点に関して様々なことを述べているが具体的な方針は示されていない。また、河村（2012）は学級経営のうまくいかない問題の一つとして、教育環境として低いレベルの状態の学級集団を取り上げていた。そこには信頼感のある人間関係（リレーション）とルールの確立が関与していると述べている。リレーションとルールの確立の中で人間関係が固定化している単学級は、クラス替えができないことから長期的な人間関係が影響する。そこで、筆者は道徳の授業で学級全体に対して、児童に働きかけようと考えた。だが、担任からの聞き取りやHyper-QUの分析から学級全体に働きかける授業よりも、個別の児童の援助ニーズにあわせて個別に支援する方が、援助的であるとの判断に至った。このようなことから本実践では学級経営の状態に留意しながらどのように子どもを支援し、支えていくのかについてアセスメントツールを使用して、クラス内の人間関係や個別のニーズに対してアプローチを仕掛けていくか考えた。

2. 実践

本実践では、アセスメントツールとして図書文化社発行のHyper-QUを採用している。介入の対象として、担任や管理職を含めたHyper-QUの分析から6名の児童を抽出した。抽出した児童は、Hyper-QU項目内で学校生活意欲尺度の学習意欲の「学校の勉強をしていて、できなかったことができるとうれしい」に対して、「そう思わない（1点）」もしくは「あまりそう思わない（2点）」と回答している児童4名、ソーシャルスキル尺度「かかわりのスキル」全項目の低い児童1名、「うれしい時は身振り手振りで気持ちを表している」に「ほ

とんどしていない（1点）」と回答した児童2名の計6名（条件重複の児童1名あり）であった。そのため、本研究の目的は「学校の勉強をされていて、できなかったことができるとうれしい」と感じる児童、感情を表に出すことのできる児童を増やすことを目的とした。かつ、学習意欲を高めることによって学校適応力を向上させることをめざした。事前測定として2022年10月6日に一度目のHyper-QUを行った。次に、介入を週2回行っている実習の中で、2022年11月中のあらかじめ決定した5日間において古市・柴田（2013）、若田・水落（2017）らの先行研究から効果的と判断した児童に対する肯定的な声かけを、授業中を中心とした学校生活全体で意識して行った。最後に事後測定として、2022年11月18日に二度目のHyper-QUを行った。

3. 考察と結論

3.1 変化の分析

実践の結果、まず学校生活意欲尺度の学習意欲の「学校の勉強をされていて、できなかったことができるとうれしい」の項目に関する4例に関して報告する。

学習意欲に関する項目に対して、2名の児童が改善し、そのほかの2名の児童に変化はみられなかった。学校生活意欲尺度の「学習意欲」の「学校の勉強をされていて、できなかったことができるとうれしい」の項目に関しては3名の児童が1-2点の改善がみられた。また、ソーシャルスキル尺度に課題がみられた児童も学習意欲は9点から12点と上昇した。よって、個別に対する称賛する・肯定するといった声かけは学習意欲に対するはたらきかけとしては効果的ではなかった可能性がある。

ソーシャルスキル尺度に課題がみられた児童や「うれしい時は身振り手振りで気持ちを表している」に課題を抱える2名の児童に関しては、当該項目に改善の傾向はみられなかった。だが、ソーシャルスキル尺度に課題を抱える児童は学習意欲に改善がみられた。かつ、学級満足度も大幅に改善している。「うれしい時は身振り手振りで気持ちを表している」といった項目に課題を抱える児童に関して、学級生活意欲尺度の友達関係の得点が増加していた。

3.2 結論と課題

本研究で目的としていた「学校の勉強をされていて、できなかったことができるとうれしい」と感じる児童、感情を表に出すことのできる児童を増やし、かつ学習意欲を高めることによって学校適応力を向上させることに対して、Hyper-QUの分析から効果的であるという結果は得られなかった。効果を得られなかった要因に関して、実践を行った学級が授業中の立ち歩きや私語が目立つ混沌緊張期（河村，2012）であったために実習生の個別支援が児童にうまく入らなかったことや連続した長期的な取り組みではなかったことなどが考えられる。一方で、介入の記録から即時的な効果は見込まれることから、繰り返しながらの肯定的な声かけを行うことは効果的である可能性がある。そのため、継続して支援を行う場合どのような結果がもたらされるのか、より効果的な声かけはあるのかなどを検討していく必要がある。